故郷第一場面　読んだ読んだ

三年三組　氏名

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、わたしは帰った。……（中略）……なじみ深い故郷をあとにして、わたしが今暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。

厳しい寒さの中、千キロも離れたはるか遠い地から、主人公は故郷へ帰ってきた。曇り空のどんよりとした天気の故郷は、少しも活気がなく、無意識のうちにもの寂しくなった。二十年、一度も忘れなかった場所なのに、長所を考えれば口には出せない。そこで、現実逃避のために、「もとからこうだった」と思い込むようにした。そう思えば、良くも悪くも変化がないことになるから。今回の帰郷は決して楽しいものではなく、村に別れを告げるため。昔から住んでいた家は今では他人のもの。明け渡しの期限は今年いっぱい。正月の前には出て行き、ぎりぎりのところで生計を立てているところへ引っ越さなければならないのだった。

さん

主人公は、帰郷の際、情景を見ると寂寥の感が胸にこみ上げた。それが故郷に行くとさらに強くなった。ただ、そんな故郷を受けとめきれず、考えてみるも見つからず、もとからこんな風だったと、寂寥の感をごまかすことしかできなかった。

さん

主人公にとって、故郷は二十年、片時も忘れることのない大切な場所だったと同時に、思い出深く、とても好きな場所だった。だからこそ、活気なくわびしい村々をみて、「覚えず」寂寥の感がこみ上げたのだ。そのため主人公は、自信の故郷を大切に思う気持ち、故郷は良い場所だったという記憶を否定し、寂しさを紛らわそうとしている。

さん

作者は、故郷に近づくにつれ情景が悪くなっていく様子を、主人公の心情と照らし合わせながら表現している。二十年前は良かったが、故郷が帰郷したときには過去の記憶を思い出せないほどの悪い状態になっていて、主人公はそのことを「昔もそうだった」と自分に言い聞かせていて、寂しい気持ちを表している。主人公は過去の心情を隠している。

さん

主人公は、苫野ついた安井船で故郷を目指した。しかし、故郷に近づくにつれて、空模様が怪しくなり、自分もだんだん不安になってきた。そして故郷について。しかし、思っていたほど活気がなく、寂寥の感が胸にこみ上げてきた。そして主人公は、自分の気持ちを落ち着かせるために、「昔も同じようだった」と言い聞かせて、自分の心境が変わっただけだと言い聞かせた。

さん

主人公は、活気の全くない死にかけの故郷を見て、主人公が覚えていた美しい故郷とはかけ離れたものだったので、それを受けとめられず、長所を見つけようとした。しかし、見つけられなかったので、昔からわびしく寂れた村だったと自分に言い聞かせた。また、今回の帰郷は、故郷別れをつけに来たためであって、楽しいものではないという主人公の心境の変化があったので、寂寥も本当はないのだと自分にうそをついた。

さん